



東京日々新聞

九百十四号



彼の先達いず官

「いず人の店へ壁を塗ろう
往て居るりから報知とさくや否や

仕事と休は俄に清中五六人と誘ひ彼ら病

人の許に至り是ハ機摩とせぬあぬを病人の枕上を盛ん
火と焚き鈴をふるたて珠教幣帛をもち異口同音「真言を唱

つ病人の頭より手足にさすまで所々探り打ち叩けん病人ハ苦痛
「絶へぬつて憑性の真似て時を告ぐと進んと思ハ速立

ち去りまゝと云ふ先達目と怒り出て行かん証據と云ふ
サ其証據ハ何と云ふと押 詰られ病人ハ

堂懸世と赤のやと二本直ぐ行かんハ此ハ皆く一同立
る王病床の辺を探し求むと云ふ又まゝありけり先達又

怒りて殿ハ此當生が此上ハ一針鐵縛ハ掛ル具ハ
いと図つり病人ハ此と起直りワリ左官

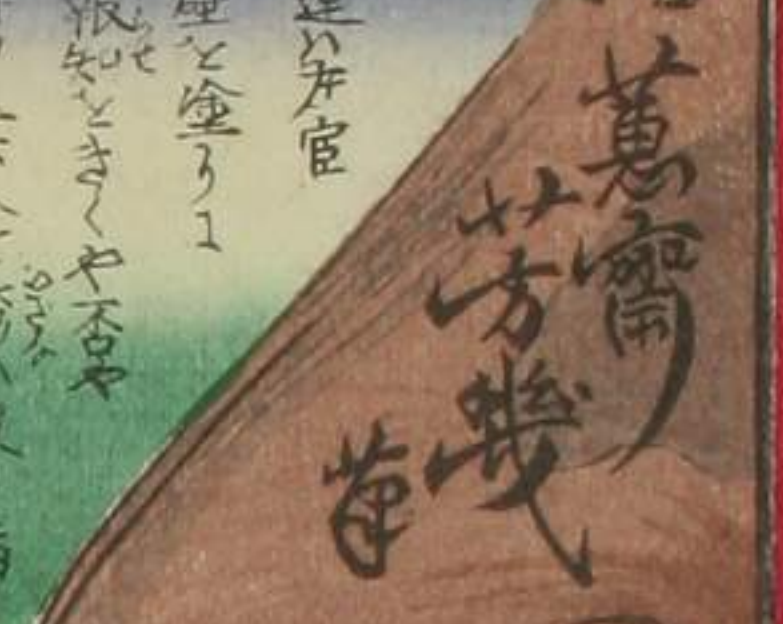
庄次郎との氣を落つけと聞れよレレカ
軀ハ口唇赤と云ふ病氣が付て居るはくり

外ハ何も付て居ねお前がさそをばつ程
ハ燃あれて居らまゝと云ふサ此ハ一ハも益

「あまの馬鹿ハ真似と云ふサ此ハ一ハも益
茶川縣廳ハ願ひ付ること目と怒らして

「台根つひられ先達ハ軒を渡り持て油伏
る顔ハさして構中ハんとももこりくと

適げ帰りの手動
馬鹿はこい
まゝ



横濱元町の商其の極毒を煩ハ車

既十三年の久ト云フ
及ハ此の此の此の此の

強ク言ハる口試ハる
ま語活と云ハる事

折々ありと云ハる家内
の考とも聞つて是ハ

全
感物

のまゝ
らん吉四

町辺に住
めん山溝

と云ハる
講ハる先

達ハ軒ハ
行其次第

と云ハる
頼

一

